

歴博における映像資料の 収集・製作・活用について

現状と課題, そして展望

Collection, Production, and Utilization of Video Materials at the National
Museum of Japanese History : The Current State and
Challenges as well as Future Prospects

内田順子

UCHIDA Junko

はじめに

① 歴博における映像資料収集の経緯

② 製作による収集

③ 展示映像とその集積

④ 展望

【論文要旨】

国立歴史民俗博物館（歴博）がこれまでに収集してきた「映像資料」は5,378点にのぼる。ここに含められていない民俗研究映像の撮影素材のマスターテープとその複製3,775点を加えると、歴博は9,153点を超える映像資料を保有していることになる。

歴博における映像収集は、歴博が設置される以前の準備室時代から開始された。当初は民俗学関連の映像を中心に購入による収集からスタートした。歴博設置後も購入による収集は継続されるが、歴博ならではの映像コレクションの構築には至っていない。一方、歴博開設後は、製作による映像収集へと力点が移行していった。「民俗文化財映像資料」と「民俗研究映像」の製作である。これらは歴博独自の映像制作事業であり、ふたつとない映像資料群となっている。しかし、価値のある映像でありながら、活用に使われることが少なく、その点の改善が今後の課題である。

また歴博は、展示の中で多くの映像を使用している。それらはビデオボックスに集約され、まとめて視聴することが可能であった。しかし、2008年の第3展示室リニューアルからはじまる総合展示の新構築によって、リニューアルや新構築がおこなわれた展示室の展示映像は、現在のビデオボックスのシステムにはのらず、ビデオボックスでの視聴ができなくなっている。展示映像の集積公開をどのようにおこなっていくのか、新しいシステムづくりが必要な段階にきている。

【キーワード】 映像資料, 学術映像, 展示映像, 博物館, 映像民俗学